

主に www.mind-trek.com/treatise/fb-twins.htm から訳出。原文
<http://bastiat.org/fr/cqovecqonvp.html>、ならびに
<http://www.econlib.org/library/Bastiat/basEss1.html> を参照。

見えるものと見えないもの

フレデリック・バ스티ア (1850)

経済の領域では、行為や習慣、制度や法律は単一の結果を生み出すだけでなく、結果の連続を生み出す。これらの結果のうち、最初のもののみが直截的なものであり、それは原因と同時に明らかとなる——それは見えるのだ。その他のものは連続のうちに隠れている——それらは見えない。もしそれらが我々にとって予見できるのであれば結構である。良い経済学者と悪い経済学者の間においては、このことがまったくの違いとなる——片や見える結果について考慮し、片や見える結果についてだけでなく、予見する必要のある結果についても考慮するのである。さて、この違いは巨大なものである。なぜなら、ほとんど常に、直後の結果は好ましいものである場合、その究極的な結果は致命的であり、その反対もまた真なるからである。よって、悪い経済学者は、その後の大いなる悪を呼ぶ小さな現在の善を追求するということになるからである。その反面、本当の経済学者は来るべき大いなる善を、現在の小さな悪のリスクと引き換えに追求するのだ。

事実、これは健康の科学、芸術、そして道徳についても同じである。最初の習慣の結果が甘いほど、その結果は苦いものであるということが頻繁にある。例えば、放蕩、怠惰、浪費をとりあげてみよう。その見える効果に酔いしれている人が、未だに見えないものについて認識する必要がある時、その人の性向によってだけでなく、計算によってさえも致命的な習慣に屈してしまう。

このことは人類の致命的に嘆かわしい状況を説明する。無知はそのゆりかごを包囲しており、その行動は最初の効果、最初の段階で見えるようなものだけによって決定される。その他の効果を考慮することを学ぶのは、長期においてのみなのである。人はこの教訓を二つのひじょうに異なった主人から学ばねばならない。それは経験と先見である。経験は効果的に教えてくれるが、そのやり方は荒っぽい。我々は、無理やりに感じさせることによって、ある行動のすべての結果を知ることになる。もし火に入れば、火が焦がすものであることを知らないことはできない。この荒っぽい教師を、もしできることなら、私はもっと心やさしいもので代用したい。つまり、先見だ。この目的をもって、これからある種の経済現象の結果を、見える結果と見えない結果を対置することで検討してみよう。

1、壊れた窓

気のいい店主であるジャック・ボノムが、彼の息子が不注意にもガラス窓を割ってしまった時に怒ったのを見たことがあるだろうか？ そういう場合に居合せたなら、そこにいるすべての目撃者が、それが30人にも上ろうが、明らかに常識として、この不幸な店主に決まり切った慰めを口にするのを、確実に見ることになるだろう。それは「みんなにとって悪をもたらす風が、本当に悪い風というものなのだ。誰しものが生きる必要があるが、もしガラスが決して割れなかったら、ガラス屋はどうなるのだ？」というものだ。

さて、このような形の慰めは、この単純な場面に十分に表れているような、全体的な理論を含んでいる。不幸にもそれは、我々の経済制度の大部分を支配しているものと完全に同じであるようなものである。

ガラスを直すのに6フランが必要だとして、その事故はガラス業者に6フランの取引をもたらしたと言う——6フランの取引を促進したのだと——。私はそれは認めよう。私はそれに反する言葉を持ってはいない。その理由づけは正しいのだ。ガラス屋が来て、その仕事をして、6フランを受け取り、手を拭いて、不注意だった息子に内心では感謝する。これらのすべては見えるものだ。

しかしその反対に、よくあることだが、もしあなたが窓ガラスを割るのは、お金が回るという点でいいことであって、その結果が一般的に言って産業の振興になると結論するのであれば、私はそれに対して叫ばねばならない、「ちょっと待て！あなたの理論は見えるものに限定されている。それは全く見えないものを考慮していない。」

店主ジャック・ボノム（訳注、ボノム Bon homme = good fellow、善良太郎というほどの名前）があることに6フランを使い、その他のことには使えないということは見えないことだ。彼が窓を取り換えなくても済んだのなら、たぶん彼は古びた靴を買い替えたか、あるいは蔵書棚にもう一冊を加えたことだろう。つまり、彼は6フランを、事故によって実現しなかった、異なったものに利用できたのである。

この状況によって影響を受けた、一般的な産業について吟味してみよう。窓が割れ、ガラス屋の取り引きは6フラン促進される。これは見えるものだ。もし窓が割れなかったなら、靴屋の取り引き（または別のものの取り引き）が6フラン促進されただろう。これは見えないものである。

そしてもしプラスの効果を持つ見えるものと同じように、マイナスの効果を持つ見えないものを考慮に入れるなら、窓が壊れようが壊れまいが、一般的にどの産業も、また国民労働の総合計も影響を受けないことが理解されるだろう。

そしてジャック・ボノム本人について考えてみよう。もし窓が割れたという前者の場合、彼は6フランを支出するが、窓から得られる恩恵は以前よりも多くも少なくもない。

窓が割れなかったという第2の場合、彼は6フランを靴に支出して、窓と靴からの恩恵を同時に享受することになっただろう。

我々が「社会は、無意味に破壊されたものの価値を失う」という予期せぬ結論に至るとき、我々は、保護主義者の髪を完全に逆立てるような格言に同意せねばならない。壊す、ダメにする、ムダにする、というのは国民労働を促進することはない、あるいは、もっと簡単には、「破壊は得にならない」。

あなたはなんと言うのか、ミスター産業さん。パリを焼き払った場合に再築が必要となる家の数から、非常に正確にいくらの取り引き上の利益があるかを計算した、良きM・F・シャマンの弟子たちよ、あなたたちはなんと言うのか。

これらの天才的な計算を混乱させたことは申し訳ない。なにせその精神は我々の立法にも及んでいるのだから。しかし、私は彼に、見えるものと同時に見えないものをも考慮に

入れて、もう一度計算することを乞う。読者は、2人の人がいるだけでなく、ここで提出された小さな状況には3人が関係していることに注意しなければならない。その一人、ジャック・ボノムは消費者を代表しており、窓の破壊によって、一つの恩恵にしか与れなかった。もう一人のガラス屋として登場したものは生産者であり、事故によってその取り引きが促進された。3人目は靴屋（あるいは他の業者）であるが、その労働は同じ原因によって同程度に害された。この3人目こそが、常に陰に隠れてしまうのであり、見えないものを体現しており、この問題に必要な要素なのだ。彼こそが、破壊行為に便益を見るといふ我々の思考が、いかにバカげたものかを示しているのである。彼こそが、結局は部分的な破壊でしかない規制というものを便益だとすることが、同じほどにいかにもバカげているかを教えてくれるのだ。よって、有利な証拠としてあげられた議論の根本に遡るなら、見つかるもののすべてが次の通俗的な物言いの言い換えでしかない——もし誰一人窓を壊さなかったら、ガラス屋はどうなってしまうのか？

2. 軍隊の解散

一つの民族に当てはまることは、一人の人間に当てはまることと同じである。ある民族が満足を得ようというのなら、その費用に値するかを考慮しなければならない。国にとって、安全保障というのは最重要事項である。もし、それを確かにするために10万人の軍隊が必要であるというのなら、私はそれに対して何の反対もしない。それは、それだけの犠牲の上に成り立つ安楽なのだ。私の主張の範囲について誤解しないでいただきたい。ある議員が1億人の納税者の負担軽減のために、10万人の軍隊を換算しようと提案した。

仮に私たちの答えが次のようなものとどまるのなら、——10万人の軍隊と、数100億の金は国家安全のために不可欠である。確かにそれは犠牲を伴うが、その犠牲なしにはフランス国家はバラバラに引き裂かれてしまうか、他国の侵略を受けるだろう——私はこの議論、それが事実正しいかもしれないし、正しくないかもしれないが、それが経済に悪い影響を与えないことから、それには何ら反対しない。間違いが起こるのは、犠牲そのものが誰からを利するものであるから利点なのであると主張されるときだ。

さて、先ほどの提案者が席に戻った途端、別の演説者が立ち上がって、次のように発言しなかったとしよう。そうであるなら、私は非常に勘違いしていることになる。「10万の軍を解散するだって！あなたは自分が何を言っているのか、分かっているのか？彼らはどうなるのか？どこに行って生計を立てるのか？どこにも職など滅多にないことを知っているのか？すべての牧場は人手あまりだ？あなたは、彼らを放り出して競争を過当にし、賃金を引き下げようとするのか？今現在、生きることそのものが難しい中で、10万人のために国家が生活をさせてやらなければならないというのは、なかなか結構なことだろう。さらに、考えて見たまえ、軍はワイン、衣服、武器、——それらは駐屯都市の産業活動を促進するだろう——を消費する。そして、つまりそれは神の使わした大量の食糧調達者なのだ。いったいなぜ、この巨大な産業的運動を捨て去るなどというアイデアに震え上がらなければならないのか。」

この論説は、明らかに、サービスの必要性和経済的な考慮から、10万人の軍隊の維持に賛成することで結語する。私が論駁しなければならないのは、これらの経済的考慮のみである。

1億ものお金を納税者のコストとする10万人の軍隊は、生活して1億フランで買えるだ

けのものを調達者に持たらす。これは見えるものだ。

しかし、納税者の財布からとり上げられた1億フランは、その限度において納税者の元での購入はできなくなる。これが見えないものだ。ここで計算してもらいたい。合計して、人々にとってどんな利益があるというのだろうか？

どこに損失があるのかを指摘しよう。議論を簡単にするために、10万人と1億フランについて語る代わりに、1人の人間と1000フランにしよう。

ここで、我々がA村にいたとしよう。リクルート隊員が巡回して、1人の男を連れて行った。徴税官が同行し、1000フランを徴収した。男とお金はメス市に行き、お金は男を1年食わせるだけに使われた。メス市についてだけ考えるなら、あなたの考えは正しい。その方法は非常に有益である。しかしA村について考えるなら、異なった考えを持つだろう。なぜなら、盲目でもない限り、村は1000フランの消費によって広がったはずの経済活動を失っていると同時に、1人の労働者とその労働報酬である1000フランを失っていることが見えるからである。

一見して、これには補償があるように感じるかもしれない。村でおこったはずのことが、メス市で起こっている、それだけだというのだ。しかし、損失は次のように計られなければならない——村では男は穴を掘り、働く。メス市では、彼は右を見たり、左を見たりする。彼は兵士なのだ。金銭とその循環は2つのケースで同じである。しかし、一方では300日間の生産労働が存在し、他方では、300日間の非生産的な労働がある。もちろんこれは、軍隊のある部分は公共の安全には不可欠ではないと考えてはいるのだが。

ここで、軍の解散されたとしよう。あなたは10万人の余剰労働者が生じ、競争が刺激されて、賃金が低下するという。これは見えるものだ。

しかし、見えないものは次のものだ。あなたは、10万の軍を解雇するということは、100万フランを捨てるということではなくて、納税者に返すのだという点を見ていない。10万人の労働者を市場に投げ出すということは、同時に、それらの労働者の支払いに必要な1億フランもまた市場に投げ出すということだ。結果的に、人手の供給を増加させるということそのものが、重要もまた増加させるのであり、賃金の低下のおそれが幻想だということを見ていない。軍隊の解散以前にも、以後にも、国内には1億フランと、それに応じた10万人の男がいることを見ていない。すべての違いは次のような点にある。解散前には、国は10万人の兵士に1億フランを何の対価もなしに配っていた。解散後は、彼らに同額を労働の対価として与える。つまり、あなたが見ないのは、納税者がその金を兵士に無償で与えるか、商品と交換に労働者に与えるかという場合に、この貨幣流通の究極の結果のすべてが、この2つのケースで同じだということであり、ただ2番目のケースでは納税者は何かを得るのに対し、1番目のケースでは何も受取らないということなのだ。その結果は、国としての完全な損失なのだ。

私がここで戦っている謬論は、理論の試金石となる、論理拡大のテストに耐え得ない。もし、すべての補償がなされ、利害関係者が満足した場合に軍隊を増やすのが利益になるのなら、なぜ国中の男を入隊させないのだろうか？

3. 税

もしかして、あなたは次のような発言を聞いたことがあるだろうか。「税は最高の投資なのだ。それによってどれだけの家庭が生活しているのかを見て、そして税が産業に与える影響を考慮するだけで良い。それは尽きることのない流れであり、生命そのものなのだ。」

この教説に反対するには、私が前述した否定法に言い及ばなければならない。政治経済の知識は、この議論をあまり好ましいものだと感じない程度には十分であるため、こういったことが言われるとき、繰り返されることになる。口頭での繰り返しが教えるため、この考えは独自性を獲得し、納得されるようになるのだ。

役人が勧める利点というのは、見えるものだ。その提供者に生じる利益もまた、見えるものである。これがすべての目を盲目にするのだ。

しかし、納税者が取り除けない不利益は、見えないものだ。そして、税が持たらず納税者への被害もまた、自明なものであるべきだとは言え、見えないものである。

役人がその利益のために余計な数フランを使うとき、それは納税者が自らの利益のために数フラン少なく使うということを意味する。しかし、役人の出費は実行されるために見えるものであるが、納税者のそれは、嗚呼！彼はそうすることを許されなかったために見えるものなのだ。

おそらく、あなたは国家を干上がった土地にたとえ、税を肥料となる雨にたとえる。そうするのも良い。しかし、あなたはその雨の原因を自問しなければならない。もしや大地から湿気を奪い、乾き切らせているのが税それ自体であるのかどうかを。

またしても、土が雨によって、そこからの蒸発した量と同じだけの貴重な水を受け取ることができるのかを、あなたは自問する必要があるのだ。

一つ非常に確かなことがある。それは、ジャック・ボノムは徴税官に数百フランを計上しても、見返りに何も得ないということだ。結局、役人がその数百フランを使って、ジャック・ボノムに返すというとき、それは同じ価格のコーンや労働の代わりにである。最終結果は、ジャック・ボノムの5フランの損失である。

確かに、多くの場合、多分、非常に多くの場合、役人はジャック・ボノムのために相応なサービスを提供しているというのは真実だ。この場合、双方に損失はなく、単なる交換があるだけである。よって、私の議論は、有益な役人についてはまったく当てはまらない。私が言っているのは、もし役所を作りたいのなら、その有用性を証明せよということなのだ。ジャック・ボノムに対する役所の価値が、彼へと提供されたサービスによって、その費用と等しいことを示せ。しかし、こういった内在的な効用から離れて、役所がもたらす役人やその家族、その取引業者にもたらす利益といった議論を持ち出してはならない。そして、役所が雇用を生み出すという主張は行ってはならないのだ。

ジャック・ボノムが本当に役に立つサービスの対価として百フランを政府の役人に支払うとき、それは彼が百フランを靴を買うために靴屋に支払うのとまったく同じだ。

しかし、ジャック・ボノムが政府の役人に百フランを支払って、迷惑以外の何ものも受け取らなかった場合は、それは泥棒に与えたのと同じだ。政府の役人がその百フランを国民労働の大いなる利益のために使うだろう、などと主張するのはナンセンスなのだ。泥棒も同じことをするだろう。そして、もしも彼が路上で余計な寄生的官憲に、あるいは合法的なハイエナに呼び止められなかったら、ジャック・ボノムだってそうなのである。

それなら、見えるものだけで判断するというのは避けて、見えないものによっても判断するように、自分たちを習慣付けようではないか。

去年、私は財政委員会の一員だった。なぜなら、有権者の賢明な判断によって、投票において野党党員がすべての委員会から組織的に排除されるということはなかったからだ。委員会では、「彼らのもの」氏が次のように述べたのを聞いた、——「私は正統派や宗教派に反対することに人生を捧げてきた。しかし今や、我々の共通の危機のために彼らとも交流し、知るようになった。そして個人的に話をしてみると、彼らは私がかつて考えていたような怪物ではないことがわかった。」

その通り、不信は誇張されており、憎しみは互いに交流しない党派から生まれる。そしてもし、多数派が委員会において少数派の存在を認めるなら、おそらくは異なった党派の考えもそれほどお互いに離れたものではないということ、そして何より、その意図においてはそれほどひねくれてはいないことがわかるだろう。しかし、昨年度、私は財政委員だった。私たちの同僚が、共和国大統領や大臣、大使たちの予算をわずかでも変えようとすると、必ず答えが帰ってきた——

「そういった役職の価値のためには、有能な人物を引き付けるべく、ある程度オフィスを華麗で威厳あるものにする必要がある。共和国大統領には、不幸な人々が大量に陳情に来るのであり、それを常に拒否する義務を負うというのは、大変な苦痛を伴う仕事になってしまうだろう。ある種の貴族的スタイルが大臣応接室にあるというのは、立憲政府機構の一部なのだ。」

こういった議論には反論があるとはいえ、確かに真剣な考慮に値するものである。正しく見積もられているかどうかはさておき、それは公益に基づいた正しい議論である。そして、私の関与する限りでは、狭隘な儉約心や嫉妬に精神に突き動かされている、我々の多くの指導者たちよりも、私の方が強い尊敬の念を持っている。

しかし、私の経済的な良心に反し、この国の知的資産に照らして私が赤面するのは、このバカげた封建時代の名残が、（いつも起こっていることだが）次のように拡大されて、好意的に受け止められてもいるということだ——

「さらに、偉大な政府の役人たちによる贅沢というのは、芸術や産業、労働を促進させている。国家のリーダーと大臣たちが夜会を開けば、必ずや社会という体の血管を循環させることになるのだ。そういったやり方を減らせば、パリの産業、そして結果的には国全体の産業を窒息させてしまうだろう。」

皆さん、私は皆さんに、少なくともこの計算に対してよく注意してもらわねばならない。そしてフランス国民議会の前で、「恥ずかしいことに議会は、足し算を上から足すか、下から足すかによって合計が違うのだ」という点において、皆さんとは意見が合わないなどといわないでもらいたい。

例えば、私は下水工事人と、百フランで土地に排水溝を作ってもらいたいということで合意している。前述したように、私たちの制度では、徴税官が来て百フランを私から持ってゆき、内務省に送る。私についてはこれでおしまいたが、大臣はテーブルにもう一皿加えることになる。一体全体、どういった理由から、この公金支出が国家産業を助けているのか？ この場合、満足と引き換えの労働という状態とは反対のことしか存在しないことが、見えないというのか？ 大臣はテーブルをより良いものにした、それは事実だ。しかし、ある農家が、土地の排水が悪くなったのも、また同じように事実なのだ。パリの酒場の店主は百フランを得たかもしれない、それは認めよう。しかし同時に、下水工事人が5フランを得ることができなかったということも認めねばならない。それは結局、次のようなことなのだ、——役人と酒場の店主が満足するということは見えるものだが、排水の悪いままの土地や仕事を奪われた下水工事人は、見えないものなのだ。なんということだ！2足す2が4だと証明することが、こんなに大変だなんて。そして証明が成功して、言われるのだ、「そんなことは自明で、本当に退屈なことだ。」そして彼らは、まったく何事も証明されなかったかのように投票するのである。

4. 劇場と美術品

国は芸術を補助すべきなのか？

この質問への是非には、確かにたくさん言うべきことがある。肯定的な意見としては次のようなものがあるだろう。芸術は国の魂を拡大させ、昇華させ、調和させる。芸術は、物質的な欲求にあまりにも心を奪われてしまうのを防ぎ、美への愛を高め、それによってマナーや慣習、道徳、さらには産業にさえも好意的に働かだろ。もしイタリア座とコンセルヴァトワールがなかったら、フランスの音楽はどうなってしまうのだろうか？ 劇場芸術についてテアトル・フランスがなかったら？ 絵画と彫刻について、現存のコレクション、ギャラリー、美術館がなかったなら？ 中央集権化とそれによる芸術への保護がなかったら、フランス産業の高貴なる一部であり、世界にその製品を輸出している精緻なる感性は発達したのだろうか？ そういった結果を目の当たりにすると、フランス市民がある程度の金銭的貢献をするということを非難するというのは、不謹慎の極みなのではないのだろうか？ 実際、ヨーロッパ的な視点から見て、それはフランスの優越性とその栄光の証左なのだ。

これら及びその他多くの理由の持つ説得力は論破することはできないものであり、そういった議論には反対できない。最初に言うべきだろうことは、そこには分配的正義の問題があるということだ。立法権は、芸術家の経済的な利益を増やすという理由のために、職人の工賃を下げるということにまで、拡大されるのだろうか？ M・ラマルタンが言ったように、「もし劇場への補助を止めてしまうのなら、どこでそれをストップするのだろうか？ 大学への、美術館への、芸術院への、図書館への補助は止めなくてもいいのか？ もし役に立つよいようなすべてのものを援助したいのなら、どこでストップするのか？ それは必然的に農業、工業、商業、慈善から教育までの内政全般のリストにつながってしまうのではないだろうか？ そうだとするなら、政府が芸術の進歩を促進するのは当然だということになる。

この問題はすでに解決されたというには程遠いものであり、著名な劇場というのはそれ

自身の獲得する対価によって繁栄していることがよく知られている。さらに、このことをさらに熟慮してみると、欲望や望みというものが相互に関連しており、市民の富がそれに費やされるに比例して洗練されてゆくものであることが観察されよう。そして、政府はこの関係に手出しをするべきではない。なぜなら、現在の富の存在状況において、有用性のある芸術活動を刺激するためには、奢侈品の特定をしないで課税をすることはできないが、それは必然的に文明の自然の発展に干渉してしまうからである。欲望、嗜好、労働や人口を人工的に変化させることは、確固とした基盤のない、気まぐれで危険な立場に人々を置き去りにしてしまうとさえ言えるだろう。

こういった理由付けが、市民の望みや欲望が充足される順番について国家が干渉すべきであり、その結果として、市民活動が方向付けられるべきだという考えに反対する人々によって主張されているものだ。白状するなら、私は、選択や衝動というのは、上からではなく下から、立法者からではなく市民から生じるべきものであると考えるものの一人だ。そして、その反対の主張は自由と人間の尊厳を破壊しがちであるように思われる。

しかし、不正であるだけでなく、誤りであると結論することによって、経済学者がどのように非難されるかご存知だろうか？それはつまり、政府の補助を否定するとき、その補助されるべきかどうか議論されているもの自体を否定しているように考えられてしまうのである。そしてまた、これらのすべての活動の敵であるようにも考えられてしまう。なぜなら私たちは、これらの活動は一方では完全に自由に、また他方では報酬の獲得を目指しつつ行われることを望むからだ。よって、もし私たちが、国家は宗教的な事柄に対して課税による干渉をするべきでないと考えるならば、私たちは無神論者になってしまう。課税によって教育に干渉してはならないといえ、教育への敵愾心を持っている。課税によって土地あるいは特定の産業分野に対して仮定的な価値を与えるべきではないと言うなら、財産や労働の敵である。もし国家が芸術家を補助するべきでないとこのなら、芸術を無用なものとして見下す野蛮人なのだ。

こうした結論に対して、私は全力を持って抗議するものである。私たちが、国家は、他の分野の活動を犠牲にしてまで宗教、教育、財産、労働、芸術を促進を図るべきではなく、それらの自由な発展を守るべきだというとき、これらのすべてを捨て去るという馬鹿げたアイデアを主張しているのではまったくない。その反対に、私たちが思うところでは、こういった社会の活力あるパワーは、自由の影響の下により調和的に発展するものなのだ。そして自由の下においては、それらが現在見られるように、トラブルや濫用、専制や混乱の原因となることはないだろう。

私たちへの反対者は、歳出によって補助されても、政府によって規制されてもいない活動というのは破壊されるべきものだと考えているのだ。私たちは、ちょうどその反対だと思っている。彼らの忠誠心は立法者にあつて、人間にあるわけではない。反面、私たちの人間にあつて、立法者にはない。

よって、M・ラマルタンは言った（訳注：19世紀フランスの詩人、分筆家、政治家）。「この原理に基づいて、我われは、この国の誇りであり財産である公共展示を廃止しなければならない。」しかし、私はM・ラマルタンに言うだろう、「あなたの思考法では、補助しないというのは廃止することだ。なぜなら、国家の意思から独立して存在するものはないという格言にそつて、あなたの結論では、存在するものはすべて国家がそうしようと意図したものとなる。しかし、私は、あなたが選んだまさに好例であるこの主張に反対する。そして、もっとも自由で普遍的な精神において、——いや人間性という言葉を使おう、

それはまったく誇張などではない——もっとも壮麗で高貴な展示だと認められているものは、現在ロンドンで準備されている展示なのだ、ということを描きさせてもらおう。それはどのような政府の助力を得ているわけでもなく、どんな税金も投入されていない唯一のものなのだ。（訳注：これは1850年のロンドン・ハイパークでの第一回万国博覧会のこと。ガラスと鉄によるクリスタルパレスや各国の産物を集めた展覧会は、ロンドン市民からの入場料や寄付によって黒字となった。）

美術品に戻ろう。繰り返すなら、政府の援助システムには、賛否について提起されるべき多くの理由付けが存在する。読者に理解してもらいたいのは、この文章の目的は、これらの理由付けを説明するというものでもなければ、賛成あるいは反対の決定をすることでもないということである。

しかし、M・ラマルタンは、私がどうしても看過できない議論をしている。なぜなら、それは次の経済学と関連しているからだ。「劇場についての経済的な疑問は、一言でまとめられる。それは労働だ。この労働の本質が何であるかはほとんどどうでもよい。それは国内の他の労働と同じほどに実りの多い、生産的なものである。皆さんおわかりのように、フランスの劇場というのは、少なくとも8万人のさまざまな労働者の生活の糧となっている。石工、室内装飾家、衣装製作者、建築家、などなどの人々は、この首都のまさに生命であり活動なのである。この点において、皆さんは彼らに同情を与えるべきなのだ。」同情をだって！むしろ、お金を、と言いたまえ。

さらに彼は、「パリでの遊興は地方での労働と消費なのであり、金持ちの贅沢はすべての領域の20万人もの労働者の賃金と食べ物になっている。そういった人々は、共和国の外観を形成している劇場の周辺産業で生きているのであり、彼らは、フランスを光り輝かせているようなこれらの高貴なる遊興から、その家族や子どもの生命と必需品を得ているのだ。彼らにとっては6万フランをあなたからもらっているようなものなのだ。」（すばらしい、すばらしい。大喝采を。）私にとっては、「最悪だ、最悪だ！」と言わねばならない。これはもちろん、我われが議論している経済的な疑問についての、彼の意見に限ったことではあるが。

なるほど、確かに6万フランのうち、どれだけかは劇場の労働者のもとに行くことになる。その過程で、おそらく、どれだけかの賄賂は差し引かれるだろうが。おそらく、このことをもう少し詳しく見てみるなら ケーキはあるいはまったく違ったところへ行ってしまうのかもしれないし、あるいはそういった労働者たちは、幸運にもわずかばかりのケーキのトッピングにありついたのであるかもしれない。しかし、ここでは議論のために、画家や室内修飾家などに全部が回るということにしよう。

これは見えるものだ。しかし、いったいそれらはどこから来るのか？ これが疑問のもう一方の側面であり、同じくらいに重要なのだ。6万フランは、どこから発生したのか？そして、立法府の投票によってそのお金がリヴォリ通りへと、ついでグルネル通りへと回されなかったとするなら、どこへ行ったのだろうか？（訳注：両方ともに華麗な装飾を持つパリの大通り。）これは見えないものだ。もちろん、そのお金が立法府の投票によって投票箱の中で発生した、そしてそれは国富の純粋な増加分である、さらに奇跡の投票行為がなかったら、その6万フランは見ることも触れることもできなかつただろう、などと主張するものはいないだろう。多数者ができることというのは、お金をあるところから取って、別のところへ送ることだけであり、もしお金がある方向に向かうなら、それは別のところから方向を変えられたに過ぎない、ということ認めなくてはならない。

こういうことが現実であるため、1フランの貢献をした納税者は、そのお金を、もはや意のままにすることはできないということは明らかである。1フランの限りにおいて、彼はその満足を奪われたのであり、誰であれ、そのお金を彼から受け取るはずであった労働者は、そのお金を奪われたことになる。よって、6万フランについての投票によって、国の厚生と国民の労働に何かあるものが加えられたなどという、子どもじみた幻想には惑わされないようにしよう。それは楽しみを移転させ、賃金を移動させた、——それだけなのだ。

さてそれは、ある種の満足やある種の労働を、もっと緊急で道徳的、理にかなう満足や労働に置き換えたということではあるだろうか？ 私はこれに反駁しよう。納税者から6万フランを取り上げることによって、瓦職人、排水職人、大工、鍛冶屋の賃金をオペラ歌手に比較して低下させているのだといえるだろう。

後者の職業に属する人々が、前者の職業の人たちよりも、より大きな同情に値すると信じる理由などは存在しない。M・ラマルタンはそうは言っていない。彼はただ、劇場関連の雇用は、その他の雇用とに比べてそれより多くではなく) 同じほどに実り豊かで生産的だと言っているのだ。しかし、これには疑いがある。後者が前者ほどには実り豊かではないことの証明は、後者がまさに援助を必要としていることにあるのだ。

しかし、このような多様な労働の価値とその内在的な利点の比較というのは、私の現在議論していることではない。私がここで示しているのは、もしM・ラマルタンと彼のような議論を推し進める人たちが、喜劇の製作者たちの得る給与という片面だけを見るというのなら、その反面である納税者による給与の損失も見べきだということだ。このことをしないために、彼らは愚かにも、移転を利得と勘違いしてしまっているからである。もし彼らが、彼らの主張に対して誠実であるのなら、政府の援助に対する要請量というのはきりがないことになる。なぜなら、1フランにも6万フランにも当てはまることは、同じ状況においては、何千億フランについても当てはまるからである。

皆さん、税が議論の対象になるときは、決して「公費支出は労働者を応援する」という嘆かわしい発言によってではなく、その効用を事柄の本質から説明せねばならない。そういった発言は、公費支出とは私的な支出を置き換えられたものであり、よって、ある労働者から別の労働者への糧へ移転させるだけで、労働者全体への分配には何も付け加えていないことを覆い隠しているのだ。そういった議論は流行なのかもしれないが、理性によって正当化されるにはあまりにも馬鹿げているのである。

5. 公共事業

公共事業が地域に有益であることを確認した後に、さらに一般的な評価を行うことほど自然なことではない。しかし白状するが、そういったプロジェクトを支持するために経済的な大間違いが述べられるのを聞くと、私は決して黙ってはいられない。「その上、事業は労働者に雇用を作り出すのです。」 国家が道を開き、宮殿を建て、街路を真っ直ぐにして、用水路を造ることは、ある種の労働者に職を与えることになる、——これは見えるものだ。しかし、それは別の労働者から雇用を奪っており、それは見えないものだ。

道路が始まる。千人の労働者が毎朝やって来て、夕方には労賃を持って帰ってゆく、—

—それは間違いない。もしも道路が命令されなかったとするなら、支出が可決されなかったとするなら、これらの善良なる人々はそこでは雇用も賃金も得ることはない、それもまた間違いない。

しかし、これがすべてなのだろうか？ 全体としての活動は何か違うものを含んでいないのだろうか？ M・デュパンが高らかに「立法院は可決した」と宣言する瞬間に、フォールやビノーの金庫に何百万フランが、月の光に乗って奇跡のように降りてくるのだろうか？（訳注：それぞれ当時の立法議会議長、財務大臣、公共事業大臣。）進歩が実現する際には、よく言われるように支出と同じように、政府は歳入まで準備計画してはならないのだろうか？ 徴税人を徴収に当てるように、納税者を納税に当ててはならないのだろうか？ ここで、問題の両側面を見てもらいたい。国家によって可決された大金の用途について述べるのであれば、同じように、納税者が使う予定であったが、使えなくなった用途への言及を忘れないでもらいたい。つまり、両側面のある一枚のコインであることがわかるだろう。一面にはそれによって利用された労働があり、それは見えるものだ。その反対の面には、それによって使われなくなった労働があり、それは見えないものだ。

この著作が反駁しようとしているこの詭弁は、公共事業に使われたときにはいっそう危険である。なぜなら、それは度を越した事業や贅沢を正当化することに役立つからだ。鉄道や橋梁が本当に有用であるときは、その有用性のみを述べればよい。しかし有用性がなければどうするのだろうか？ 神秘化に頼ることになるのだ、「私たちは労働者に雇用を見つけないければならない。」

これによって、シャン・ド・マルスの下水が造られて埋められるという命令が下される。ナポレオンは溝を掘った後に埋め立てることによって、非常に博愛的な事業をしていたと言われる。それゆえ彼は言った、「その結果の何が重要なのだろうか？ 私たちが見たいのは、富が労働者階級にまで行き渡ることなのだ。」

しかし、この事象の根本にまで遡って見よう。私たちはお金によって欺かれている。金銭において、公共事業にすべての市民の協力を要求するということは、実際には一種類の協力を要求するということになる。なぜなら各人はその労働において課税されて、その金銭を調達するからである。ここで、すべての市民が一度に集められて、全員にとって有用な仕事を一緒にさせられるとするなら、これは理解しやすいだろう。その報酬は、その仕事の結果を見ればわかるだろうからだ。

しかし、全員を集めた後に、誰一人通らない道を造ることや、誰も住まない宮殿を造ることを口実として働かせようとするなら、それは馬鹿げており、彼らは「この労働で私たちは何も得るものがない、私たちは自分のために働いたほうがましだ」と主張する権利を持つだろう。

労働ではなく、金銭を徴収することによって市民を協力させたとしても、この一般的な結論は、どういう意味においても変わらない。違いは、損失がすべての人々にかかってくるということだけだ。金銭徴収による場合、国家によって雇用された人々は、同胞たる市民がすでに被った損失のうち、自分たちの分だけを逃れることになる。

憲法には次のような条項がある、——「社会は、国、県、地方自治体が公共事業を確立し、仕事を求めるものを雇用することによって労働の発展を奨励し、促進する。」

緊急の場合、厳しい冬場の一時的な手段としては、納税者によるこういった干渉も有用かもしれない。それは保険と同じような役割を持つ。それは雇用にも賃金にも何もつけ加えないが、通常時の雇用や賃金を、損失は伴うものの、困難な時点へと移すのだ。

永続的・一般的・体系的な手段としては、それは破滅的な神秘化、不可能性、以外の何ものでもない。それはわずかばかりの労働者の喜びを伴う、それは見えるものだ、同時に大量の実現されなかった労働を強いられることになる、それは見えないものなのだ。

6. 仲介人

社会というのは、人々が互いのために自発的、あるいは強制的に提供するサービスの総和である。それはつまり、公共サービスと民間サービスのことだ。

前者は法律によって規制・強制されており、望ましい場合にも容易には変えることができない。それは、もはやサービスではまったくなく、公共迷惑となっているときでも、それ自身に対する有用性だけで公共サービスという名を保持し続けることがある。後者は自由意志、個人の責任の領域にある。すべての人が、その望み、可能であるものを、熟慮の後に与え、受け取る。それらには常に、相対的価値に完全に比例して、真の効用が推定される。

これが、前者のサービスがこれほど頻繁に停滞的になるのに対して、後者が進歩の法則に従う理由なのである。

過剰な公共サービスの発達は、社会の持つ強靭さをくじきながら、社会に対して致命的なへつらいを植えつけている。他方、それとまったく同根なのが、現代の諸学派が、こういった性質を自由で私的なサービスに帰しながら、知的職業を儀式へと変更しようと試みていることだ。

これらの学派は、彼らが仲介人と呼ぶものに強行に反対する。彼らは資本家、銀行家、投機家、事業家、商人、貿易商のことを、生産と消費の間に立ち入って、何も見返りに与えないままに両者から金を要求していると非難して、喜んで抑圧するだろう。あるいはむしろ、彼ら自身の仕事を国家に委譲しさえするだろう。なぜならその仕事は抑圧することができないものだから。

この点における社会主義者の詭弁は、仲介人がそのサービスの対価として得ているものを人々に示しながら、国家に対して支払う必要となっているものを隠していることにある。これは、我われの目の前にあるものと、心でしか把握できないもの、見えるものと見えないものとの間に、常に存在する軋轢なのだ。

社会主義諸学派が、その致命的な理論を広めようと努力し、成功したのは、1847年の窮乏の時にあってであった。もっとも馬鹿げた考えというものは常に、苦しんでいる人々にこそ広まる可能性があることを、彼らは熟知していたのだ。飢餓は悪たる相談者なり。
(訳注：ヴェルギリウス、『アエネイス』のVI 276より)

よって、「人による人の搾取、飢餓への投機、独占」という素晴らしい言葉の助けを受けて、彼らは消防を邪悪なものに仕立て上げ、その利益にヴェールを被せた。

彼らは言う、「アメリカやクリミア半島からの食料の輸入を商人に任せておいていいのか？ どうして国が、県が、町が店への貯蔵・供給サービスを組織しないのか？ そうすれば卸売価格で買うことのできるようになり、人々は、哀れなものたちは、自由な、つまりエゴイスティックで個人的、無秩序な商業への献金から逃れることができるだろう。」

人々が商業に支払う献金は、見えるものだ。社会主義体制において人々が国家やその代理に支払うだろう献金は、見えないものだ。

この人々が商業に支払っている献金のように見えるものは、何から成っているのだろうか？それはつまり、競争と価格低下へのプレッシャーを受けつつも、完全に自由な状態において、二人の人間が互いに互恵的なサービスを与え合う、ということだ。

パリには飢えた胃袋があって、それを満たすトウモロコシがオデッサにある場合、トウモロコシが胃袋のもとへと運ばれなければ苦しみはなくなる。これには3つの手段がある。一つ目、飢えた者たちが自分でトウモロコシをとりに行くこと。二つ目、彼らは貿易を業とするものたちにこの仕事を任せること。三つ目、彼らは一緒に集まって、公共機能を受け持つ事務所に任せること。これら3つのやり方の、どれがもっとも大きな利点を持っているだろうか？ どの時点においても、どの国においても、そしてより自由で啓蒙され、経験を多く持つ人々ほど、自発的に二つ目を選んできた。私の意見では、この事実だけで、選択を正当化するに十分であると思う。人類が、全体として、これほど身近なことにに関して自分たち自身を欺き続けているとは思えないのだ。しかし、このことについて熟慮してみよう。

4600万人の市民がオデッサにトウモロコシをとりに行くというのは、明白に不可能だ。よって、最初の手段は意味を成さない。消費者が自分自身で行うということではできない。彼らは、必ずや、仲介人か、役所、あるいは代理商に頼らなければならない。

しかし、この3つのうち、最初のものがもっとも自然であることを考えてもらいたい。実際に飢えた人はトウモロコシを手に入れなくてはならないのだ。それは彼自身の問題であり、彼にその責任がある。もし他のものが、どういった理由であれ、彼のために自らこの仕事を行うのであれば、その人は報酬を要求する権利を得る。私がここで言いたいのは、仲介はそれ自身のうちに、報酬原理を内在するということだ。

それが何であれ、私たちは社会主義者が寄生虫と呼ぶものについて話しているのであるから、商人と役所のどちらの方が、寄生虫にふさわしいかを私は問いたい。

商業（もちろん、自由なもの、そうでなくては議論が成り立たない）は、自らの利益の増進を図るために、時節を見はかり、収穫状況についての毎日説明し、世界のあらゆる地域からの情報を集め、そして需要を予見し、先んじた警戒をするのだと言える。常に船を用意し、随所で取引先を確保する。そして、できるだけ安い値段で買い、業務の細部にいたるまで節約し、もっとも少ない努力でもっとも大きな結果を達成するのは、直近の利益につながる。必要時にフランスへの供給物を調達することを仕事にするのは、フランスの商人たちだけではない。そしてもし彼らが必然的にもっとも少ない費用で仕事ができるのなら、それによって実現された節約の利益は、同業同士の競争によって、同じように必然的に消費者にも分け与えられることになる。トウモロコシは到着する。それをできる限り早く売るのは、リスクを回避し、その資金を回収し、もう一度最初から始めることになっ

て、商人の利益となる。

相対的な価格に導かれて、最初は常にもっとも高い価格の場所から、つまり、もっとも需要の高いところから始まって、国の隅々まで食料が行き渡る。必要とする人々の利益に合致するように、これ以上に完全に計算された組織を考えることはできない。そしてこの組織の美点、それは社会主義者たちには認識されていないのだが、はそれが自由であるということからくる。陸運、海運、備蓄、手数料などの出費について消費者が業者に返済する義務を負うというのは確かに本当だが、一体、トウモロコシを食べるものがトウモロコシにあり付くための費用を、それがどういった費用であれ、支払う義務を負わないようなシステムなど考え付くことができるのだろうか？ なされたサービスへの報酬は支払わなければ成らない。しかし、その量に関しては、競争によってできる限り小さなものへと低減されている。そして正義については、マルセイユの商人がパリの職人のために働いているのに、マルセイユの商人のためにパリの職人が働かないというのなら、たいへんにおかしなことだろう。

社会主義の企てによって、もし国家が商人の代わりにするのなら、どんなことが起こるだろうか？ 公衆に行くべき節約分はどこに行くというのだろうか？ 購入価格にだろうか？ ある日にトウモロコシが必要となって、4万人の地域住民の代理人がオデッサについたと想像してもらいたい。その価格への効果はどうなるのかを想像してもらおう。出費のどこかが節約されるだろうか？ 貨物船が、船乗りが、運送人が、帆船がより少なく済んだり、あるいはこれらの出費を免れることができるというのだろうか？ それとも商人の儲けが節約できるのだろうか？ 彼ら役人がただでオデッサに行くのだろうか？ 彼らは友愛の原理において旅をして、働くというのか？ 彼らは生きてはならないのだろうか？ その時間に対して対価を受け取ってはならないのか？ そしてこれらの出費が、取引額の2、3パーセントにしかならない商人の利益の1千倍にもなるとは思わないのだろうか？

そしてまた、それだけの課税を行うこと、それだけの食料を分配することの難しさを考慮してもらいたい。そういった試みに不可避である権限の濫用や不正義について考えてもらいたい。政府にのしかかる責任について考えてほしい。

これらの愚考を考案した、そして困難な時期に人々の心にそれを植えつけた社会主義者たちは、自分たちのことをまさに進歩的人間だと喧伝した。そしてそれは、言語を規定している慣習によって、その言葉が正当化される危険と、その言葉が持つ語感を伴っているのだ。進歩的だって！ この言葉は彼らが一般人よりも先を見ることができ、その唯一の欠点は彼らが時代のはるか先を行っていることだということだ。もし、寄生虫だと呼ばれる、自由企業が未だに禁止されていないとするなら、その欠陥は社会主義に遅れをとっている大衆のせいなのである。私はこの魂と良心に誓って、その反対が真理なのだとおもう。そしてこの点についての社会主義者の知識の低さに匹敵するには、どれだけの未開時代に戻らなければならないのかわからないほどだ。彼ら現代の偏狭主義者は、現実社会への人間的なつながりに対して、絶え間なく反対している。彼らは、規制のない状態においてのみ、社会に本当の人間のつながりが可能なこと、そして、彼らのどんなに豊かな想像力の産物よりも、それがはるかに優れていることを見逃しているのだ。

このことを例示してみよう。人が朝起きてコートを着る前に、以下のことをがなされる必要がある。地面は囲い込まれ、分割され、灌漑され、耕され、ある種の植物が飢えられなければならない。家畜にはエサが与えられ、そこからウールが得られる。ウールは撚糸

され、織布され、染色されて織物になる。布は切られ、縫われて、衣服になる。この一連の作業には、耕具、羊小屋、納屋、石炭、機械、運び台、の仕事その他の、多くの異なった仕事が必要だ。

もし社会が人の完璧なつながりではないのなら、コートが欲しければ、一人で働く必要があることになる。つまり、最初に地面に鋤を入れることから、最後の1縫いまで、これら数え切れないほどの作業を自分自身でこなすのだ。しかし、我われの種を特徴づける性質である社会性のおかげで、これらの作業は複数の労働者に分配され、素晴らしいことに、さらに消費が活性化するにしたがって、1種類の作業だけで他の作業と分業ができるほどに、それらはさらに細分化されるのだ。

そして利益の分配となる。それは、それぞれの作業が全体の作業にもたらした潜在的な価値にしたがって行われる。これが人々のつながりでないのなら、何がそうなのか知りたいものだ。

よく見て欲しい。これらの労働者の誰一人として、何かを無から作り出しているのではなくて、互恵的なサービスに従事して共通の目的に向かって助け合っているだけであり、他人の立場からすると全員が中間生産者なのである。もしも、例えば、その作業において運搬が一人の労働者の専従させるほどに重要となり、燃糸が別の一人を、織布がまた別の一人を、となるのなら、なぜ運搬が、燃糸と織布に寄生しているなどを考えるのか？ 運搬は為されなくてはならないのではないのだろうか？ それを行うものはその時間と労力をささげているのではないのか？ そして、それによって彼は同僚がそれをしないで済むようしているのではないのか？ 同僚の仕事のほうが彼の仕事よりも意義があるのか？ 彼らは同じように、その報酬、つまり生産物の分配を、価格が低減することに依っているのではないのか？ 自由にうちにおいて、共通全のためにこれらの仕事は配置されているのではないのか？ それなら、社会主義者に何を求めるのか？ 彼らは、我われのために組織を作るとみせかせて、専制的に自発的な取り決めに破壊し、分業を阻み、共同の努力を単独のものに置き換え、文明を対抗させにに来る。ここで私が描いたような人のつながりは、それ自体がつながりの拒否ではないのか？ なぜなら、人々は自由にやってきては去り、その居場所を見出し、自らのためにその責任において判断・交渉し、個人的利益を生み出し、確保するのだから。確かにその名に値するかもしれないが、見せ掛けの改革者がやってきてその計画と意思を我われに押し付け、それにすべての人間を参加させる必要があるのだろうか？

これら進歩的な学派に検討をすればするほど、その根底には唯一つのものがあることがわかってくる。絶対無謬だと主張する無知、そしてその無謬性名における専制の要求なのだ。

読者がこの寄り道を許してくれることを願おう。サン・シモン派、ファランステール支持者、イカリア派の書籍から始まる大演説が新聞や雑誌に影響を与え、それらが労働と取引の自由に脅威を与えている時期においては、すべてが無用でもないかもしれない。

(訳注：ファランステールはフーリエ主義者、イカリア派はフランス人カベールによって始められたユートピア主義)

7. 規制

M・プロヒバン（この名前をつけたのは私ではなく、M・シャルル・デュパンである）
（訳注：「禁止さん」とでも意味するほどの名前）は、自分の土地で見つかった鉄鉱石を精錬するのに大変な時間と資産を投じた。自然はベルギーにおいてより豊かであるため、ベルギー人はフランスに対してM・プロヒバンよりも安く鉄を供給した。それはつまり、すべてのフランス人、あるいはフランスは、誠実なベルギー人から買うことによって、より少ない労働量で一定量の鉄を入手することができるということだ。よって、自分の利益に導かれてフランス人はそうすることを怠らず、毎日大勢の釘職人、鍛冶屋、車大工、機械工、蹄鉄工、それらの助工が、自分が出向いたり、あるいは仲介人を送ってベルギーで鉄を調達したのであろう。このことはM・プロヒバンを大変に不愉快にさせた。

当初、彼はこの逆境に対して自分の力で終止符をうとうとした。しかし彼一人が困っているため、それは到底不可能だった。「私は銃を使う」彼は言った。「ベルトに4つのピストルを装着し、カートリッジもつめて、刀を纏い、この装備で国境に行く。そこで、私と関係のない仕事をするために現れた最初の鍛冶屋、釘職人、蹄鉄工、機械工、錠職人を殺し、彼らにどうやって生きるべきかを教えるのだ。」それを実行しようとした瞬間、M・プロヒバンは考え直して見て、戦争じみた意気込みを少しばかり落ち着かせた。彼は独り言を言った、「そもそも、私の同郷人であり敵でもある鉄の購入者が悪意にとって、彼らを殺す代わりに、彼らが私を殺すことも、まんざら不可能でもない。そして、私がすべての従業員を呼び出したところで、通行口をとめることはできないだろう。つまり、これは金をもたらす以上に、大きなコストがかかるだろう。」

M・プロヒバンの脳裏に光線が走ったとき、彼は、自分が他人と同じ程度にしか自由ではないという、その悲しい運命から脱却できることに気づいた。パリには立法産業があることを思い出したのだ。「法とは何だ？」彼はつぶやいた。「それはいったん成立すると、良いものだろうが、悪いものだろうが、全員がそれを守らなければならないものだ。同じことをするために、公共力が組織され、その公共力のために国中から人と金が集められる。だから、もし私が偉大なパリの産業に『ベルギーの鉄は禁止』という些細な法律を通してもらえば、次のような結果を得ることができるのだ。つまり政府が、私が国境に送ろうとしていた数人の従業員の代わりに、あの手に負えない鍛冶屋、農民、職人、機械工、錠職人、釘職人、助工たちの2万人にも及ぶ息子たちを送ってくれる。そして、これら2万人の税関の役人を機嫌よく生活させるために、政府は鍛冶屋、釘職人、職人、助工たちから2500万フランを集めて配るだろう。彼らは国境をよりよく守ってくれる。そして私は出費をすることがない。私は仲買人の脅威にさらされることもなく、自分の好きな価格で鉄を売ることができ、さらに偉大な同胞たちが恥ずべきような誤魔化しを受けるといった甘美な満足さえも得る。彼らは、自分自身が永遠にヨーロッパの進歩を増進し、その先駆けであるとまで主張するだろう。オー！ それは素晴らしいジョークだが試してみる価値はある。」

こうしてM・プロヒバンは立法産業に赴いた。おそらくまたいつか彼の袖の下の話にも触れようと思うが、しかし今は、彼の表向きに行動についてだけ述べよう。彼は立法議員諸氏の前に、以下のような考慮をしてもらおうよう持ち出した。

「ベルギーの鉄はフランスでは10フランで売られており、私もまた同じ価格で売るよう強要されています。私は15フランで売りたいのですが、ベルギーからの鉄のためにそれができません。まったく、ベルギーの鉄は紅海の底に沈んでもらいたいと願っております。」

私は、ベルギー産の鉄がフランスに輸入できないような法を要請いたします。即座に私は価格を5フラン上げ、次のような結果を得ることができます。「100単位の鉄ごとに、私は10フランではなく、15フランを受け取ります。私はより豊かになり、産業道路を伸ばし、より多くの労働者を雇います。私たちは近隣の商人に対してもっと鷹揚にお金を使うことになります。商人は顧客が増えて、より多くを雇い、この国のどの産業もが盛んになります。あなた方が私の金庫に与えてくれます幸運なるわずかな金銭は、湖に投げ込まれた石のように、無限の波紋を生み出すのです。」

この議論に魅せられて、立法によって容易に人々の繁栄を促進できることを喜び、立法者たちは規制に投票した。「労働や経済について言うなら」彼らは言った、「国の富を増進させるために、命令が必要なだけだというのに、こういった苦痛を伴うような手段に何の意味があるというのか？」

そして、実際、法律はM・プロヒバンによって喧伝された通りのすべての結果をもたらした。一つだけ違うのは、彼が予見しなかったことももたらしたということだ。彼に対して公平であるなら、彼の理由付けは間違いではなかった。ただ不完全だったのだ。特権を得ようと努力するなかで、彼は見える効果だけを認識し、その背後にある見えないものを忘れていたのである。彼は二当事者だけについて指摘したのだが、この事態には三者がかかわっている。私たちが指摘するのは、この意図せざる、あるいは論点の前にある省略なのだ。

法律によってM・プロヒバンの金庫にもたらされたクラウン銀貨が、彼とその労働者にとって有利なものであったのは真実だ。そしてもし、法律によってクラウン銀貨が月から降って来たというのであれば、これらのよい効果は、それに対応する悪い効果によって打ち消されることはなかっただろう。不幸なことに、その不思議な銀貨は月から来たのではなくて、鍛冶屋、釘職人、車職人、蹄鉄工、助工、あるいは船大工、つまりは10フランを支払って前より少ない鉄しか受け取れなくなったジャック・ボノムのポケットから来ているのだ。よって、これが状況を変えたことは一目瞭然だ。なぜならM・プロヒバンの利益は、ジャック・ボノムの損失と釣り合っていること、そしてM・プロヒバンがその銀貨によって国の労働を奨励するためにできることのすべては、ジャック・ボノムが自分自身でできたこと、が明らかだからだ。石が湖の一方から投げられたのは、別の方向から投げられるのを法律が禁止したからなのである。

よって、見えないものは見えるものを凌駕しており、この時点でこの一連の行為の結果として不正義が残り、悲しいことに、法によって不正は永続する。

これがすべてではない。私は、常に第三者が背景に取り残されていると言った。さらにもう5フランの損失を明らかにしてくれる者を前面に引き会いに出そう。それによって、取り引きのすべての結果が明るみになることになる。

ジャック・ボノムはその労働の対価である15フランの持ち主だ。今彼は自由だ。彼はその15フランをどうするのだろうか？ 彼は何か流行りものを10フランで買い、そのために彼（あるいは彼の仲買人）はベルギーの鉄100単位分を支払う。その後、彼には5フランが残る。彼はそれを皮に投げ捨てることはせず、その代わりに（これが見えないものだが）誰か商人に、その何らかの楽しみのために、例えば、本屋にボシュエの『世界史序説』と引き換えに使うのだ。

よって、国民の労働が関連する限り、15フラン分が促進されている。すなわち、10フランはパリの商品に、5フランは本の取り引きに。

ジャック・ボノムについては、彼は15フランによって二つの満足を得る。つまり
一番目、100単位の鉄。

二番目、本。

命令は執行される。それはジャック・ボノムの状況をどう変化させるだろうか？ それは国民の労働をどう変化させるだろうか？

ジャック・ボノムは5フランすべてをM・プロヒバンに支払い、そのために本の楽しみ、あるいはそれと同じ価値を持つ何か別のものを奪われてしまう。彼は5フラン損をしている。これは認識されなければならない。規制が物の値段を引き上げるとき、消費者はその差額分の損をするのだということは、決して見落とされてはならない。

とはいえ、国民の労働にとっては得るものがある、と言われる。

違う。得るものはない。なぜなら、法律によって、15フラン以上に、より促進されているわけでないからだ。

唯一の違いは、法律のために、ジャック・ボノムの15フランは金属取り引きに使われたが、その施行以前には、炭鉱業と出版業に別れていたということだ。

M・プロヒバンが国境において使った、あるいは法律によって彼が使わせるように仕向けた暴力は、道徳的な視点からは、非常に異なって判断されるかもしれない。法律によって肯定されるならば、その略奪は完全に是認できると考えるものもあるだろう。しかし、私にとっては、それよりも破壊的なものを想像できない。それが何であれ、経済的な結果は両方において同じなのである。

好きなように見てもいいだろう。しかしもし公平であるなら、不正は順法、違法の略奪の双方から生じていることがわかるだろう。それがM・プロヒバンとその商人、もしそう望むなら、国内産業を5フランの利益分だけ豊かにすることは否定できない。しかしそれは二つの損失を生じさせると断言できる。一つはジャック・ボノムのもので、彼はそもそも10フランしか支払わなかったはずなのに15フランを支払った。もう一つは国内産業であり、それは差額を受け取ることができなかった。これらの二つの損失のどちらでも選んで、利益とつり合わせるがいい。もう片方の損失は完全な損失であることがわかる。教訓はこうだ、暴力によって奪うのは生産ではなくて、破壊なのだ。実際のところ、暴力で奪うことが生産なら、我われのこの国は今あるよりももう少し豊かだろう。

8. 機械

機械に呪いあれ！ 毎年、その増大するパワーは何百万もの労働者の職を、そして賃金とパンを奪い、彼らを貧困へとおとしめる。機械に呪いあれ！

これが民衆の思い込みに基づく叫びであり、ジャーナリズムでも繰り返される。

しかし機械を呪うことは、人間精神を呪うことなのだ。

そんな主張に満足を感じることがなぜできるのか、私は不思議でならない。

なぜなら、もしそれが真実なら、その不可避的な結論とはどのようなものだろうか？それは誰にとっても活動性、繁栄、富、幸福などが不可能になってしまうということだ。その例外は、愚かで自動性を欠くものたち、そして考え、観察し、まとめ上げ、発明し、最小の手段によって最大の結果を得るという決定的な才覚を神によって与えられなかったものたちだ。その反対に、ぼろ布、みすぼらしい丸木小屋、貧困、飢餓というのは、鉄や火、風、電気、磁力の中に化学と力学の法則を見出そうとする、つまり自然の力の中にその力への補助を見出そうとするすべての国に不可避な運命となる。ルソーと同じように「すべて考える人は墮落した動物だ」とも言えるだろう。

これだけではない。この主張が正しいとしよう。すべての人は考え、発明し、そして最初から最後までその生存のどの瞬間においても自然の力を利用し、その労力や出費を下げ、少ないものから多くを取り出し、できるだけ少ない量の労働からできるだけ多くの満足を得ようとするものであるから、当然に、すべての人間は進歩への心理的な傾向そのものによって、人々を苦悶させる衰退へと駆け出していることになる。

だから、統計によって明らかにされるべきことは、ランカシャーの住人はその機械のあふれた土地を捨てて、機械の知られていないアイルランドへ職を求めに行くことである。また歴史によって明らかにされるべきことは、野蛮が文明の新時代を暗がりにし、無知と未開の時代において文明は光輝くということである。

これら大量の矛盾には我われを不快にする何かが明らかに存在し、その問題自体の中に、これまで十分に分析されてこなかった解決の要素があることと思わせる。

すべてのミステリーはこうだ。つまり見えるものの背後に何か見えないものがあるのだ。それを白日のもとに晒してみよう。私が示すことは前述したことの繰り返いだ。なぜなら問題はただ一つであり、同じものだからだ。

人間は、反対する力が存在しないときは、できるだけバーゲンを目指すという自然の傾向を持っている。つまり、相手が外国の生産者であっても、熟練機械生産者であっても、その労働に対してできるだけ多くを得ようとする。

この傾向に対する理論的な反論は、どちらにおいても同じだ。どちらにおいても、それは労働を明らかに活用しないということが非難される。ここで、労働を活用しないことではなくて、それを暇にすることこそが重要なのだ。だから、どちらのケースでも、実際には同じ障害物、——力、が反対されている。議会は外国との競争を禁じ、機械との競争を禁止する。すべの人に自然な性向を抑止するために、その自由を奪うという方法以外に、どんな方法があるのだろうか？

確かに多くの国においては、立法者たちはこの二つの競争のうち、一つだけを標的にして、もう一つについては不満を述べるにとどまっている。このことはつまり、立法者のつじつまが合っていないということを証明しているに過ぎない。

このことに驚く必要はない。間違っただ道では、不可避免的につじつまは合わない。そうでなかったら、人類はその犠牲になっていただろう。間違っただ原理は、これまでも、これからも終点にたどり着かないのだ。

ここで、例示をしよう。それは長いものにはならない。

ジャック・ボノムは二人の労働者を使って2フランを得た。しかし彼は、ロープと重しを使えば、その労働を半分に減らすことができることに気づいた。こうして彼は節約しながらも同じ金をもうけ、一人の労働者を首にした。

彼は一人の労働者を首にした、これは見えるものだ。

そしてこれだけを見て、「文明の悲惨さを見るがいい。これこそ自由が平等にとって致命的である有様だ。人間精神の超克によって、即座に労働者は貧窮のふちに投げ込まれる。ジャック・ボノムは二人の労働者を雇うことができた。しかし二人は競争によってもっとも低い賃金で働くことになり、ボノムは賃金を半分しか支払わなくなった。こうして富めるものは常にますます豊かになり、貧しいものはより貧しくなる。社会は設計され直す必要がある。」素晴らしい結論だ、前口上に値する。

幸運なことに、前口上も結論も両方が間違っている。なぜなら半分の見える現象の背後には、残りの見えない半分があるからだ。

ジャック・ボノムによって節約されたお金は、この節約の必然的な結果と同じように、見えないものだ。

彼の発明の結果として、ジャック・ボノムは大きな競争利益を得るために一フランだけを労働者に支払うことで、残りの1フランは手元に残っている。

もし世界に雇われていない労働者がいれば、使用されていない資金を持つ資本家がいる。二つの要素は出会い、結合される。そこには労働の需要と供給、賃金の需要と供給において何の変化もないことは、日の光のように明らかだ。

発明と、最初のフランによって雇われた労働者は、今や、かつては二人の労働者によって為されていた仕事をする。二人目の労働者は二番目のフランによって雇われ、新しい種類の仕事を実現する。

では、生じた変化は何なのか？ 追加的な国民の利益が得られた。つまり、発明は無償の大勝利、——人類への無償の恩恵なのだ。

私の例示の形式から、次の推論を引き出すかもしれない、——「機械からの利益のすべてを受け取るのは資本家である。労働者階級は、苦しみが一時的なものであったとしても、そこから恩恵をこうむることはない。なぜなら、例示されたように、機械は確かに国民の労働を減らしこそしていないが、増やすこともしておらず、その一部を置き換えたのだから。」

私はこの薄い著書において、すべての反論に答えようとは思わない。私がかもくろんでいる唯一の目的は、卑属で、広く信じられている、そして危険な偏見と戦うことだ。私が示

したいのは、新しい機械によって、その報酬が労働者から差し引かれてしまった時、いくばくかの労働者が仕事から解き放たれることになるだけだということだ。これらの労働者とその賃金が結合することによって、発明以前には生産することが不可能であったものを作り出すだろう。そこから、最終的な結果は、同じだけの労働からより多くの生産物が得られるという利点だということになる。

この追加的な恩恵を受益者は誰なのか？

最初に、確かに資本家、発明者が受ける。機械を最初に使うことに成功したものであり、それは彼の天才と勇気への報酬だ。この場合、例示したように、彼は生産費を節約したのであり、その節約分がどのように使われようと（そして必ず使われるのだが）、機械によってクビになった労働者の数とまったく同じだけの雇用を生み出す。

しかし、すぐに競争がその節約分を価格低下分にしてしまい、発明者はもはや発明の恩恵を受けることができなくなる。恩恵を受けるのは、購入者、消費者、労働者を含む市民、つまり人類なのだ。

そして、見えないものは、すべての消費者のための節約分は、その後の賃金を支払うための資金となること、そしてまた、その賃金は機械によって節約された分に置き換わること、なのだ。

よって、前述した例に戻るなら、ジャック・ボノムは2フランを賃金に使うことによって利益を得る。発明のおかげで、賃金は1フランだけである。彼がその生産物を同じ価格で売る限り、この生産のために一人少ない労働者を雇うことになる。これが、見えるものだ。しかし、ジャック・ボノムが節約した1フランによって雇われるもう一人の労働者がいる。これが、見えないものだ。

自体が自然と変化して、ジャック・ボノムが生産物の価格を1フラン下げざるを得なくなったとき、彼はもう、商品生産のために必要な労働者を雇うための1フランを持っておらず、節約分はもはや彼のものではなくなる。新しい受益者がとってかわる、それは人類だ。ボノムの生産物を買ったものは、誰であれ1フラン少なく支払うのであり、必然的にこの節約分を次なる賃金の資金とする。このことは、またもや見えないものだ。

事実によれば、この機械の問題には別の解決方法もある。

機械は生産費用を低下させ、生産物の価格を下げる。利益の手かは消費の増大をもたらす、必然的に生産を拡大する。最終的に、発明前と同じだけ、あるいはより多くの労働が要請される。このことの証明として、印刷、織物、などが挙げられる。

このような例示は科学的なものではない。それによれば、もし今話題にしている生産物の消費が一定か、あるいはそれに近いなら、機械化は雇用を害するということになる。これは真実ではない。

ある国ではすべての人が帽子をかぶるとしよう。機械によって価格が半減したとしても、消費は倍増はしないだろう。

この場合、国民の労働力の一部が麻痺するというのだろうか？ 卑俗な例によるなら、

ウィ、である。しかし、私によれば、ノン、である。なぜなら、もし国中で帽子が一つとして余分に売れなかったとしても、賃金となる資金は確保されて続けている。帽子の取り引きに回らなかった分は、全消費者によって実現された経済活動に回ったことが見出される。それは、機械によって不要であるとされた分の労働への賃金として支払われ、すべての取り引きの新しい発展を促すことになる。

そして、事態はこうして進展する。80フランする新聞があったが、今は48フランである。32フランは購読者の節約分である。この32フランが報道産業に向かうことは明らかではないし、少なくとも必然的ではない。しかし、そうでないなら、どこか別のところへ向かうことは明らかであり、必然的でもある。それをもっと多くの新聞の購入に使うものもいるし、またより快適な生活に、良い衣服に、良い家具に、使うものもいる。

このようにして、産業はすべて一体である。それらは大きな全体を形作っており、それぞれの異なった部分は隠された水路で連絡されている。一人による節約は、全員の利益となる。節約というものは、労働と賃金を犠牲にしてしか生じないのだということを理解することは、非常に重要だ。

9. クレジット

いつの時代でも、特に近頃はそうだが、クレジットの拡大によって富を増大させようとする試みが為されてきた。

私は誇張ではないと信じているが、二月革命以降、パリの出版社は1万以上ものパンフレットを発行して、この方法による社会問題の解決を叫んできた。この解法の基礎付けはといえば、ああ！錯覚なのだ。実際、もし錯覚が基礎付けと呼べるのならば。

最初に為されるのは現金と生産の混同であり、ついで紙幣と現金との混同、そしてこれら二つの混同から現実が引き出されるとされる。

この問題においては、生産活動が次々と受け渡される手段となっている、通貨、コイン、紙幣、その他の道具を忘れ去ることが絶対的に必要だ。つまり、我われのビジネスは生産そのものにあって、それが貸し出しの真の目的物なのだ。農夫がスキを買うために50フランを借りるとき、実際に貸し出されたのは50フランではなくてスキだ。商人が家を買うために2万フランを借りるとき、彼が負っているのは2万フランではなくて、家なのだ。金銭は、当事者間の契約を促進するために現れているに過ぎない。

ピエールは自分のスキを貸したがるかもしれないが、ジャックはそのお金を貸そうとするかもしれない。この場合、ギロームは何をするのか？ 彼はジャックからお金を借りて、そのお金でピエールにスキを買うのである。

しかし、実際のところ、誰もお金それ自体のためにお金を借りるわけではない。お金とは生産物の所有権を得るための媒介物に過ぎない。つまり、ある国において、その国に存在する以上の生産物を、ある人から別の人に与えることはできないのだ。

現金や紙幣の流通量がどれだけであろうとも、すべての貸し手が持っている以上のスキ、家、道具、原材料を借り手が受け取ることはできない。なぜなら、すべての借り手には貸

し手がいるのであり、借りたものというのはローンを意味しているからだ。

このことを前提とすると、クレジット制度にはどのような利点があるのだろうか？ それは借り手と貸し手の間で、互いを見つけたり契約したりすることを促進するのだ。しかし、貸し借りをするものを即座に増やすというような力は持っていない。とはいえ、望むものすべての手にスキ、家、道具、食料を与えるという改革の目的が達成された場合には、そういうことを可能とするべきなのである。

彼らはどうやってこれを実現しようとしているのか？

国債をローンに転換ことによってである。

このことについて洞察を与えてみよう。それは見えるものと、見えないものを含んでいるからだ。その両者を見る必要がある。

ここで、世界には一つのスキがあって、二人の農民がそれを借りようとしているとしよう。

ピエールはフランスに唯一存在するスキの持ち主である。ジャンとジャックはそれを借りたい。ジャンは、その誠実さと財産、良い評判によって、安心できる。彼は信頼に値し、クレジットがある。ジャックにはまったく信頼が置けない。ピエールがジャンにスキを貸すのは当然のことになる。

ここで、社会主義の計画に従って、国家が介入し、ピエールに対して「おまえのスキはジャックに貸しなさい。その返済については、我われが保証しよう。この保証はジャンのものよりも優れている。なぜなら、彼は彼のほかに責任を負うものはいないが、我われの場合は、確かに今は何も持っていないくとも、納税者の財産を処分できるのであり、このお金を持って、必要な場合には、元本と利子を支払うからだ」と言う。その結果、ピエールはスキをジャックに貸す。これは見えるものだ。

そして社会主義者は手を揉みながら言う。「我われの計画の素晴らしさを見ろ。国家の介入のおかげで、かわいそうなジャックはスキを借りた。彼はもう地面を掘る必要がないし、これから財を成すだろう。それは彼にとって良いことだし、国家全体にとっても利点なのだ。」

皆さん、実際には違う。それは国家の利点などではない。その背後には、見えないものがあるからだ。

スキがジャックの手にあるということはジャンの手にはないからだ、ということは見えない。

ジャックが穴を掘る代わりに農業をするなら、ジャンは農業をする代わりに穴を掘る必要があるよう貶められたことは見えない。

結果、貸し出しの増加だと考えられたものは、単なる貸し出しの置き換えにすぎない。さらに、このローンの置き換えが、二つの非常に不正な行為を意味することも見えない。

ジャンはその誠実さと良き活動によって、ふさわしい信用を得たにもかかわらず、ロー

ンの機会を奪われたことは、彼に対する不正義である。

自分と関係のない借金を支払わされたことは、納税者に対する不正義である。

ジャックに対するのと同じような機能を政府がジャンにも与えたと主張するものがあるだろうか？ しかし、スキが一つしかない以上、二つを貸すことはできない。「国家の介入のおかげで、貸し出されるためのものよりも多くのものが借りられた、なぜならスキはここでは貸出資金を意味するからだ」というような社会主義の主張が常になされる。

私が金融活動をもっとも簡単な表現に簡略化したのは事実だが、もしも、もっとも複雑な政府の信用制度を同じテストにかけてみれば、その結果において同じであることが納得できるだろう。すなわち、信用を置き換えているだけであって、付け加えているわけではないことを。ある国の、ある一時点において、利用可能な資金の量は一定であり、それらはすでに貸し出されている。貸し出しへの保証によって、国家は実際に、借り手の数を増やすかもしれない。しかし、国家は貸し手を増やし、貸し出し全体の重要性を増やす力は持っていない。

しかしながら、私が引き出してはいると思われたくない一つの結論がある。私は、法律は貸し出しの力を作為的に増大させるべきではないと言っているが、その力を作為的に抑制するべきだとは言っていない。もし、我われの担保付貸し出しその他のシステムにおいて、信用貸し出しの適用を拡大することを阻むものがあるのなら、それは取り除かれねばならない。このことはもっとも正しく、正義に適うことである。しかし、これだけが自由と整合的なのであって、これだけが改革者の名に値するものが要求するべきなのだ。

10. アルジェリア

ここに、議題について論争している4人の演説者がいる。最初、4人全員が同時に話し、ついで、次々に話す。彼らは何を言ったのか？ もちろん、フランスの力と偉大さについてのとてもすばらしいことだ。もし収穫を得ようとするなら、種をまく必要があることについて。我われの巨大な植民地の輝ける未来について。我われの人口の余剰を遠隔地に分散させることの利点について、などなど。壮大な雄弁を誇る演説、そして常に次の結論によって装飾されている——「5千万フランほどをかけて、アルジェリアに港と道路を造ることに投票せよ、ここへ移民を送り、家を作り、区画整理をするために。そうすれば、フランスの労働者を救い、アフリカでの労働を奨励し、マルセイユの商業に刺激を与えることがになる。それは、すべての意味で利益となるのだ。」

その通り、それはまったく正しい、国家が5千万フランを使い始めるまで、それについて考慮しないというのであれば。もしお金がどこに行くのかだけを見て、どこから来るのかを見ないのであれば。お金が徴税人のバッグから出てきてからの良い面だけを見て、お金をバッグに入れることから生じる悪い面や、そのために行われないことになった良い面を見ないのであれば。その通り、このような限定的な視点からは、すべてが利益となる。北アフリカに造られる家は、見えるものだ。北アフリカに造られる港は、見えるものだ。北アフリカでつくられた雇用は、見えるものだ。これらよりやや少ないフランスでの雇用は、見えるものだ。マルセイユでの商品の搬送もまた、見えるものだ。

しかしこれらの他に、見えないものもある。国によって出費された5千万フランは、納税者によって、もしそういうことがなかったら使われたであろう用途には使われなかった。政府によって為された出費によって生じたすべての良いことから、個人的な出費が為されなかったことから生じる害悪を差し引く必要があるのだ。ジャック・ボノムは彼が稼ぎ、税金として奪われたお金で何もしないのではない。そう言うのは馬鹿げている。なぜなら、彼は苦勞してお金を稼いだのであり、それを使うことから満足を得るからだ。彼は庭の柵を直しただろうが、今それはできない。これは、見えないものだ。彼は畑に肥料を撒いただろうが、今それはできない。これは、見えないものだ。彼は別荘に二階を建て増しただろうが、今それはできない。これは、見えないものだ。彼は工具の数を増やしただろうが、今それはできない。これは、見えないものだ。彼はもっとたくさん食べ、良い服を着て、子どもに良い教育を与え、娘の婚礼費用を増やしただろう、これは、見えないものだ。彼は相互扶助協会の会員になっただろうが、今はできない。これは、見えないものだ。一方では、奪われてしまった楽しみがあり、壊されてしまった行為がある。その一方では、彼が活動を促進したはずの下水工事、大工、鍛冶屋、仕立て屋、村の学校教師は、今はそれを邪魔された——これらすべては、見えないものだ。

アルジェリアの将来的な繁栄からは多くのことが期待できる。その通りだ。しかしフランスが失うものを、完全な視界の外にやってはならない。マルセイユの商業は際立っている。だがこれが税という手段によってもたらされるのであれば、同じ分だけ国内の別の場所での商業が破壊されていることを、私は常に示さねばならない。「北アフリカに移送される移民がいる。それは国内に残る人々を助けることだ」と言われる。私は言う、「もしアルジェリアに移民を送り出すのに、フランスにとどまる場合の2、3倍の資金も一緒に送り出すのなら、どうしてそんなことがいえるだろうか？」

軍事大臣が最近述べたところでは、アルジェリアに一人を送り出すためにかかる費用は8千フランである。さて、これらの貧しいものたちは4千フランもあれば、フランスで十分に生きていけただろう。一人と同時に、二人の生計分がなくなるのなら、どうしてフランスの民は助かるのだろうか？

私がここで唯一の目的としているのは、すべての公的支出について、その明らかな利益の背後には、容易には見出しがたい悪が存在していることを、読者に明らかにすることだ。私ができる限りにおいて、読者には両者を見て、両方を考慮する習慣をつけてもらいたい。

公共支出が提案された場合、その結果とされる雇用の促進を別にして、それ自体のメリットを吟味しなければならない。なぜなら雇用の促進は幻想だからだ。このように公共支出によってなされることはすべて、私的な支出によっても同じことができる。よって、雇用への関心は、常に問題外のことだ。

この論の目的は、アルジェリアに対する公共支出の持つ内在的な価値を批判することにあるのではないが、それでも私は、一般的観察を止めることができない。それは、税を通じた公共支出には常に問題があるという考えである。なぜか？ それは次のような理由による。第一に、それによってある程度の正義が損なわれてしまうからだ。ジャック・ボノムは自分で楽しもうと働いて金を稼いだのに、国税がそれに干渉して彼の楽しみを他人に与えるというのは残念なことだ。確かに、それらの税を課す人々には、十分な理由を提示する義務がある。私たちは、国家が嫌悪すべき理由を示してきたのを知っている。「この金で、労働者を雇わねばならない。」もちろん、これに対して、ジャック・ボノムは（そのことに気が付くやいなや）次のように答えるだろう。「それは結構だ。しかし、その金

で私は自分で彼らを雇えるだろう。」

この理由はさておき、他の理由はこうした偽装がなされていないため、国庫と哀れなジャックとの議論ははるかに単純なものとなる。もし国家が彼に対して、「おまえの金を、身の安全を守るのに役立つ警官を雇うために、毎日通る道を舗装するために、財産と自由を守る民の裁判官を雇うために、国境を守るための兵を維持するために、使おう」というなら、ジャック・ボノムは、私が間違っていないなら、躊躇せずに金を支払うだろう。しかし、国家が彼に「おまえがうまく耕地を耕した時に小さな賞金を与えるために、彼の望まない教育を息子に与えるために使うために大臣が豪華な晩餐にもう一品を加えるために、アルジェリアに家屋を建てるために、移住者への援助は言うまでもなく、さらに移住者を守るための兵を維持するために、さらにその兵を見張るための将兵を維持するために、などなどに、金を使おう」というなら、哀れなジャックは「この法システムは、無法のシステムとほとんど同じじゃないか！」と大声で叫ぶと思う。国家はこの反論を予想して、どうするのだろうか？ 全部を一緒にくたにして、その質問と関係のない、もっともらしい理由を持ち出すのだ。雇用に与える影響を語り、大臣の料理人や御用商人について指摘し、税収に頼る移民や兵、将校の存在を示す。これらは、事実、見えるものだ。そしてもし、ジャック・ボノムが見えないものを考慮に入れることを学んでいないならば、彼はだまされているのだ。これが、何度も何度も繰り返すことによって、私がそのことを彼に教えるために全力を尽くしたい理由なのだ。

公共支出が雇用を増大させることなく、単に産業間を移動させるとき、公共支出に反対する第二の深刻な懸念が持ち上がる。雇用を移動させるということは、労働者を移動させるということであり、国の人口配置を律する自然の法則を妨害することだ。もし5千万フランが納税者のもとに留まるなら、それはフランスの4万の行政区の雇用を促進することになる。それは自然の紐帯としての役割を果たし、皆を故郷の土地に維持し続け、考えられるすべての労働や商業に分配される。もしこの5千万フランを市民から国家が取り上げて、ある場所で使うなら、それに見合った分の雇用が移動し、その分だけ他の土地に属する労働者が移動し、その土地に属さない流動的な人口が集まるだろう。そしてそれは、あえて言うならば、資金が尽きたときには危険さえあるのだ。ここに以下のような結論がある（そしてそれは私の言ったことを裏付ける）。こうした熱狂的な活動は、いうならば、狭い場所に閉じ込められて、皆の注意を引く。それは、見えるものだ。人々は喝采し、手順の美しさと簡単さに驚き、その継続と拡大を求める。見えないものは、おそらくはもっと価値のある同じ数の雇用が、フランスの他の地域で創出されるのを阻まれたことなのである。

11. 儉約と贅沢

見えるものが見えないものを日食のように隠してしまうのは、何も公共支出だけのことではない。政治経済に関係することに加えて、この現象は誤った道徳的正当化へとつながってしまう。国内の道徳的利益と物質的利益が相反するものであるかのように見せるのだ。このことより落胆し、気がめいることなどあるだろうか？ 例えば、

秩序、統制、注意深さ、儉約や金使いを抑制することを、子どもに教えることを義務と考えない家父はいない。

虚飾と贅沢を糾弾しない宗教はない。そうであるべきである。がその反対に、次のような格言をなんと頻繁に聞くことだろうか。

「貯蓄は、人々の生気を干上がらせてしまう。」

「高貴な人々の贅沢は、庶民の慰めである。」

「浪費は自らの破滅となるが、国を富ませる。」

「貧者のパンとなるのは、富者の余剰である。」

確かにここには、道徳的な考えと社会経済的な考えの間に目に余るほどの矛盾がある。この軋轢を指摘した後、どれだけの偉大なる人々が静穏を保てるのか？それは私が一度も理解できないことだ。なぜなら、人間の心にある二つの相反する傾向を見るほどに耐え難いことはないからだ。人類は、一方の極端にあるのと同じほどに、もう一方の極端においても墮落してしまう！ 儉約なら悲惨を生み、放蕩は道徳的な破滅に墮してしまう。幸運なことに、これらの卑俗なる格言は、儉約と贅沢とに偽りの光の下に照らしている。それらは、直近の見える結果にのみを考慮に入れ、遠くに存在する見えないものを考慮していないからだ。この不完全な見方を修正してみよう。

モンドールとアリストゥスの兄弟は、遺産分割をした後、年に5万フランの収入を得ることになった。モンドールは流行りのフィランソロピーを実践する。彼はいわゆる浪費家だ。一年に何度も家具を新調し、毎月馬車を買換える。人々は、金をすばやく使うための彼の高貴なる計略について語り合う。つまり彼は、バルザックやアレキサンダー・デュマの享楽生活を上回る。

彼への賞賛は引きも切らない。「モンドールについて教えてくれ！ モンドールよ、永遠に！ 彼は労働者に恵みを与え、人々に祝福をもたらす。本当に、彼は贅沢にふけり、通行人にさえ金をまく。そして彼の尊厳と人類の品性は少しばかり低下する。しかしそれがどうした？ 彼は、自身の労働によるかどうかは別にして、その財産で善を成している。金を循環させて、商人を常に満足させて帰らせている。金が丸く造られているのは回るためだと言うではないか？」

アリストゥスは非常に異なった人生設計を採った。彼は、自己中心主義者でないにしても、少なくとも個人主義者ではある。なぜなら、彼は消費について熟慮し、穏当で適度な楽しみを求め、子どもたちの将来について考えた、つまり節約をするからだ。

そして、人々は彼について何と言うか？ 「あいつのような金持ちに何の意味がある？ あいつはケチ野郎だ。確かに、やつの生活の単調さは見上げたものだし、人道的で博愛精神もある。だが、やつは計算高い。やつは収入全部を使ったりしない。家も豪華じゃないし、人も集っていない。内装職人や馬車職人、馬商人、菓子屋にどんな利益をもたらしていると言うのか？」

こういった道徳的には致命的な意見は、贅沢に伴う出費という、目に入る一つの事実に基づいている。そして、それと同量あるいはそれ以上にもなる節約的な消費という、もう一つの事実は目に入らない。

しかし、社会秩序の聖なる設計者によって、すべてが驚異的に見事に配置されている。他のこと同様、このことについても、社会経済と道徳性は対立するどころか完全に一致しており、アリストウスの知恵はモンドールの愚行よりも品位があるだけでなく、利益にもかなっているのだ。そして、私が利益にかなっていると言うとき、アリストウスにとってだけ、あるいは社会全般に対してでさえもなく、労働者自身、つまりすべての産業にとっても利益があるのだ。

この証明のためには、現実の目には見えない人間行動の隠された結果に対して目を向けさえすれば良い。

なるほど、モンドールの贅沢はすべての点において目に見える効果を生み出している。誰でも、モンドールの折りたたみ幌のついた馬車、二頭立て四輪馬車、四輪箱馬車、天井画の繊細さ、豪華な絨毯、豪邸の輝きを見ることが出来る。モンドールの馬が競馬場を走っていることを知っている。彼がオテル・ド・パリで開く晚餐は大通りの人々の耳目を集め、人々は「気前のいい男だ。収入を使うどころか、資産まで使っているに違いない。」これは、見えるものだ。

労働者の利益という観点からは、アリストウスの所得がどうなっているのかを見るのは容易ではない。しかし、注意深く行く先を考えてみれば、そのすべてが、最後にいたるまで、モンドールの財産と同じように労働者に雇用を与えていることがわかるのだ。唯一の違いは、モンドールの度外れた贅沢は次第に減少する運命にあり、必ず終わりを告げるが、アリストウスの賢明なる消費は年々増加するということだ。

もしそうなら、確実に公益は道徳と調和する。

アリストウスは自分と家計のために年2万フランを使う。もしこれで満足しないというのなら、彼は賢明な人間であると呼ばれるに値しないだろう。彼は貧者に降りかかる災難に同情し、その援助のために良心から1万フランを寄付する。彼には、商人や製造業者、農民にも一時的な困難を抱える友人がいる。その状況を知り、慎重に、そして効果的に援助するためにも、さらに1万フランを使う。最後に、彼は婚礼費用を用意すべき娘と、将来を期待される息子がいることを忘れない。そのため、年に1万フランを貯蓄に回す。

よって、以下が彼の支出リストである。

1、自家消費	20000フラン
2、慈善活動	10000フラン
3、友人の援助	10000フラン
4、貯蓄	10000フラン

これらの項目を見れば、最後のお金にいたるまで国民の産業に回っていることがわかるだろう。

1、自家消費 人々の雇用や産業に関する限り、この出費はモンドールが使う分の額と完全に同じ効果を持つ。このことは自明なので、これ以上は語らない。

2、慈善 この目的のための1万フランは産業に対して同額の利益をもたらす。肉屋、

パン屋、仕立て屋、大工のもとに届くのである。違うのは、パン、肉、服はアリストゥスのためではなく、彼の代理となった人々によって使われることだ。そして、ある消費者が別の消費者に取って代わることは、一般的には取り引きに影響を与えない。アリストゥスが金を使うか、その代わりに別の不幸な人が使うようになるかは、まったく同一だ。

3、友人の援助 アリストゥスが金を貸した、あるいは与えた友人は、地面に埋めるために金を受け取るわけではない。そうだとすれば、そもそもの仮定に反する。友人は商品を買うためか、借金を返済するために金を使う。前者の場合、取り引きが促進される。モンドールの買う1万フランのサラブレッドのほうが、アリストゥスまたは友人の買う1万フランの買い物よりも価値があるなどと言うものがあるだろうか？借金の返済に使われた場合、第三者、つまり貸付人が現れることになるが、その金は仕事か、家庭のためか、農場のためかには必ず使われることになる。彼はアリストゥスと労働者の間に入るだけだ。名目は変わっても、出費は同じであり、産業の振興も同じである。

4、貯蓄 残りは貯蓄された1万フランである。この点においては、芸術や商業、雇用や労働の振興において、モンドールがアリストゥスよりも上回っているように見える。とはいえ、道徳的にはアリストゥスのほうがどれだけモンドールよりも優れている。

こういった自然法則の明らかな矛盾を見るとき、私は苦痛となるほどの精神的な居心地の悪さを感じる。もし人間が、その利益に反することと道徳に反することのどちらかを選ばなくてはならないとするのなら、その未来は絶望するしかない。幸運なことに、そうではない。アリストゥスはその道徳的な優越と同じように、経済的な優越を回復するには、外見上の矛盾にもかかわらず真理であり、心癒される原理を理解するだけでいい。つまり「貯蓄することは、消費すること」である。

アリストゥスが1万フランを貯蓄する目的は何なのだろうか？ 100スー金貨2千枚を庭に埋めるためだろうか？ もちろん、違う。資産と所得を増やすためだ。その結果、その金は彼の個人的な楽しみを購入するために使われる代わりに、土地や家、国債の購入、起業活動のために使われるか、あるいは商人や銀行家の手に渡るのである。これらの場合の資金の行く先を追跡してみれば、売り手や貸し手という仲介人を通して、それらが雇用を促進することに納得できるだろう。それは間違いなく、モンドールの例に倣えば、あたかもアリストゥスはその金を家具や宝石、馬と交換したかのごとくにである。

アリストゥスが1万フランで土地や証券をを買ったするとき、それは彼が金を使いたくないと考えたからだろう。これが、彼への不満となるのだ。

しかし同時に、土地や証券を売った者は、その金を何らかの形で使いたいという考えから売ったのだ。だから、どのみちアリストゥスか、あるいはその代わりに誰かによってその金は使われることになる。

労働者階級や雇用の促進については、アリストゥスとモンドールの行為には一つの違いがある。モンドールは自分で消費するため、その効果は目に見える。アリストゥスは部分的に仲介者を通じて消費するため、その効果は目に見えない。しかし、実際のところ、効果をその原因に正しく起因させることができるものにとっては、見えないものは見えるものと同じくらい確実なものとして認識される。このことは、両方の場合において、金は循環しているという事実によって証明される。浪費の場合と同じように、金は賢いものの鉄金庫の中にあるのではないのだ。よって、儉約が産業を害すると言うのは間違いだ。上述

したように、それは贅沢と同じほどに有益なのである。

しかし、もし現在についてのみ考えるのではなく、もっと長期について考えるなら、儉約はどれほど贅沢よりも優れているのだろうか。

10年が経つ。モンドールとその財産、大変な人気はどうなるのだろうか？ すべてを失い、彼は破産する。経済に対して毎年6万フランを使うどころか、彼は経済の負担となっている。どうであるにしても、彼はもはや店主たちを喜ばすことはない。もはや芸術や商業のパトロンでもなく、労働者に対しても、あるいは彼が貧困に導いたその子孫の役にも立たない。

同じ10年が終わった後、アリストゥスはその取得を経済に還元し続けているだけでなく、その消費は毎年増え続けている。彼は資産を増大させ、つまり、その資産は賃金を提供する。その資金量に応じて労働需要が決まり、彼はますます労働者階級に多くの報酬を与える。彼が死ぬとすれば、彼の子どもたちが、こうした進歩と文明の仕組みを継承する。

道徳的な見地からは、贅沢に比べた儉約の優越は議論の余地がない。ある現象の直近の効果にとどまらず、最終的な効果について考察する能力を持つすべてのものにとって、政治経済の見地においてもそうであると考えるのは、心が癒されることである。

12. 働く権利を持つ者は、利益を得る権利を持つ

「同胞たちよ、集い、あなたの思う賃金で私を働かせよ。」 これが労働する権利であり、つまり第一段階の、初級社会主義である。

「同胞たちよ、集い、私の思う賃金で私を働かせよ。」 これが利益を得る権利であり、つまり第二段階の、より洗練された社会主義である。

そのどちらもが、見える効果の上に生きている。それらは、見えない効果を通しては死んでしまう。

見えるものは、集いによって社会に課された労働であり利益だ。見えないものは、もし同じ額が納税者の手元に残されたなら生じたであろう労働と利益だ。

1848年に、労働の権利は、しばらくの間、二つの顔を持っていた。これは、世論において労働の権利が破滅するのに十分であった。

一つは、国民労働組合と呼ばれる。もう一つは、45センチムである（訳注：二月革命時に新しくかけられた税）。毎日何百万フランもがリボリ通りから国民労働組合に流れた（訳注：パリー一番の繁華街）。これはコインのうるわしい方の面である。

しかし、その反対の面はこうだ。金庫から何百万フランを持ち出すためには、その金が最初に金庫に入る必要がある。これが、労働権の組織者が納税者に掛かってゆく理由である。

農民は言う、「45センチムを支払わねばならない、そのため、衣服をあきらめ、畑

に肥料をやれず、家の修繕もできない。」

そして地方の労働者は言う、「私の同郷のものが衣服をあきらめたために仕立て屋の仕事が減り、畑の地味を肥やせないために排水工事人の仕事が減り、家を修繕しないために大工にと石工の仕事が減るだろう。」

よって、一つの袋から二つの種類の食事は出てこないのであり、政府による仕事は納税者によって支払われる労働の犠牲の上に成り立っていることが証明された。これが労働権の死であり、それは不正義であると同じほどに妄想なのだ。しかしながら、利益を得る権利は、それは労働権を誇張したものであるが、未だに生きており、繁栄している。

そうした主義を持つものが社会に果たさせている役割には、恥すべき部分はないのだろうか？

彼は社会に対して言う、「私は社会から職を得る権利を持つ。それだけでなく、利益をもたらす職をである。馬鹿げたことに、私はその価値の10%も失ってしまう職に就いている。もし私の同郷人に20フランの課税をして私にくれるなら、私は損をする代わりに利益を得ることになる。利益を得るのは私の権利である。社会は私にその義務を負っている。」さて、このような詭弁家に耳を傾ける社会は、彼を満足させるための税負担に苦しむことになる。そして、一つの産業での損失をなくしたとしても、それは別の産業に肩代わりされているだけでまったく損失は変わらないことを見過ごしている。そういう社会は、あえて言わせてもらえば、そういった負担に喘ぐにふさわしいものだ。

よって、これまでに扱ってきた多くの話題からは次のことがわかる。政治経済の無知は、現象の直近の効果に目くらましをされることであり、政治経済を知ることは、直近と将来のすべての効果の全体を考慮に入れることだ。

私は、これらの他の多数の疑問を同じテストにかけることができるだろう。しかし、示すことはいつも同じであるという単調さのため、ここでは止めておき、シャトーブリアンが歴史に対して言ったことを、政治経済に当てはめることで結論としよう。（訳注：シャトーブリアンは19世紀フランス・ロマン主義の先駆的作家）

「歴史には二つの結果がある。一つは瞬間的に知覚できる直近のものであり、もう一つは当初は知覚できない離れたものである。これら二つの結果は、頻繁に矛盾する。前者は私たちの限られた知恵の結果であり、後者は永続する知恵の結果だ。人間的出来事の後、神意による出来事は発生する。神は人間の背後に立ち現れるのだ。望むだけ、神意からの戒めを否定し、神の御業を信じず、御言葉を批判し、人々が神意と呼ぶものを”状況の力”や”理性”と呼ぶが良い。しかし実現した最後の事実を見るなら、当初から道徳と正義に基づかないものは、常にその期待と反対のものを生み出すのを見るだろう。」

——シャトーブリアンの死後出版された回顧録より

